

表現における評価の観点について —オペレッタ発表の自己評価と他者評価の結果から—

横 井 志 保

はじめに

保育現場では、日常のごっこ遊びから、発表会等で披露する、劇やミュージカル、オペレッタといった、役になりきって表現することは盛んに行われている。しかし現状では、そのような身体的な表現活動に対しての評価尺度が明確に示されていないことで、活動への保育者の援助の視点が不明瞭な状態にあると指摘されている。¹⁾

オペレッタの上演や創作を通して、表現力の育成や保育に活かそうとする研究は多く、また、自己評価や他者評価後の学生の気づきに関する研究もなされている。^{2) 3)} 中でも、体験的気づきは貴重で、自己評価力の向上に繋がるとしている⁴⁾が、それらは全て、各々違った題材を演じたり、オリジナル作品による評価であり、評価する学生らは、それぞれが、特色を持った作品を評価しており、評価の観点は作品によってばらつきがある。本研究では、全てのグループが同じ作品を演じ、それを評価した。同一のシナリオ、歌、曲を、いかに工夫して演じ、アレンジを加え、それぞれのグループのオリジナルとするのが試された。発表の後、自己評価と他者評価の両方をした。そこでの学生らの評価の観点を明らかにすることで、今後の表現活動における評価の対象を明確にすることができ、保育においては、子どもに対して的確な援助ができるようになるを考える。河北が言うように「他者の改善点を指摘しながら、自身の課題を得ることができる」⁵⁾ のであれば、演じる際（園における発表会等での指導においても）の適切な「見せるポイント」を掴んだ表現ができるようになるを考える。

本研究の目的は、学生のオペレッタ発表の自己評価と他者評価から、評価の観点を明らかにすることを目的とし、その結果から、今後の表現の授業における指導、また、保育における表現活動の指導、援助の一助としようとするものである。

方法

授業内で行ったオペレッタのグループ発表について、学生一人一人に他のグループの評価と自己評価、両方について自由記述と5段階評価を求めた。

(1) 対象：N大学児童教育学科幼児保育学専攻 2年生89名

(2) 期間：2012年6月22日～7月20日

(3) 方法：授業時間5コマを利用し、内4コマを練習（4回目は中間発表とし）、最後の1コマを発表会と同時に評価とした。

また、2クラスは別々に行った。

(4) 内容：全グループ（2クラス8グループ）同じイソップ物語の「きたかぜとたいよう」のシナリオを題材として配付し、ストーリーを変更しないことと子どもを対象として演じることを条件に、演出、台詞や曲のアレンジは各グループに任せた。

評価は各グループそれぞれについて、評価できるところ（工夫してあるところ）・改善した方がよいところ（改善案）の自由記述と、5段階評価を学生の評価し易い様、評価票の欄外に以下のような指標を示した。

5：素晴らしかった

4：とてもよくできていた

3：まあまあできていた

2：もっと頑張れ

1：努力が足りない

とした。

結果と考察

(1) 5段階評価について

2クラスそれぞれの発表において、5段階で評価した結果は以下の通りである。

表1 5段階評価の平均値と授業者の評価

		Group 1	Group 2	Group 3	Group 4
クラスA	平均値	3.3	4.3	3.8	3.6
	平均値 (他者評価)	3.4	4.4	3.8	3.9
	平均値 (自己評価)	3.1	3.8	3.4	2.8
	授業者の評価	2	5	3	3
クラスB	平均値	4.0	4.2	4.4	3.6
	平均値 (他者評価)	4.2	4.2	4.4	3.9
	平均値 (自己評価)	3.6	4.1	4.1	2.8
	授業者の評価	3	3	4	3

どのグループも他者評価の平均値より、自己評価の平均値の方が低いことから、自己の点数については厳しく評価していることがわかる。また、授業者の評価より自己評価の平均値の方が低いグループが3つあるが、中でもクラスAのグループ2では、授業者は最高ポイントの5を付けているにもかかわらず、自己評価の平均値は3.8と低くなっている。このグループは個人の特技であるバレエを活かした演出をし、他のグループには無い要素を取り入れており、授業者はそれを高く評価したが、本人達はそのことも評価しつつも、反省点であるマイナス要素の方を大きく評価した結果、3.8と評価を下げることに繋がった。評価のポイント3を付けた1人の学生の自己評価の記述を見てみると、「評価できるところ」の項目には「バレエを入れたのは、真由美がいることで私たちにしかできないものができたかなと思った。手のひらを前に向けるところや、横にする所など、1つ1つ合わせた。練習でしてきたことが出ることができた。楽しかったのよ良かった。」と箇条書きではあるが、演出について、振り付けについて、練習過程について、その他心情等の4つの項目にわたり記述している。「改善した方がよいところ」の項目では、「歌詞がとんだところがあった。向きがとんだ。」と、間違えたこと1点のみについて記述し、評価のポイント3としている。評価できるところをいくつも挙げているにもかかわらず、評価のポイントは「まあまあ」としているのだ。

逆に、クラスAのグループ1では、評価ポイントの平均値は3.3であったが、ダンスの振りや動きが曖昧で、歌声も小さく、台詞も早口であったことから、授業者は評価ポイント2を付けた。また、他者の評価の記述も授業者と同じ様な内容で、「歌の声が少し小さくて歌詞が分からない。セリフがもっとゆっくり言った方が聞きやすい。全てにおいて声が大きいともっと聞きいっただと思いました。」とし、ポイントを2としたが、上から3と書き直しているものもあった。また、ポイントは4を付けているが、「歌があやふやなのかなと思うところがあったから、歌をもっとはっきりと歌えていればよりよかったと思う。」「もう少し動いた方がよかった。」といった内容の記述も多く見られた。しかし、自己評価の記述を見てみると、「改善した方がよいところ」の項目で、「歌詞に自信が持たなくて小さい声になってしまったところ。」「自分の台詞がないときがないがしろになってしまった。」とあるが、「評価できるところ」の項目で、「ダンスで、全身を使って動けるようにしたところ。歌を大きな声で歌えるようにしたところ」「中間発表のときと比べると、動きもまとまって練習の成果がでたのではないかなと思う。」と、評価するメンバーもおり、ポイントには現れ切れない他者評価と自己評価の記述の間、また、グループ内における自己評価の間にも開きがみられた。

記述の内容から、自己評価する場合、結果のみを評価するのではなく、練習の過程を思い出しながら、評価するので、「評価できるところ」の項目では、実際にはできていないことについても、自分たちがそのことについて気を付けて練習を重ねてきたこと自体を評価し、それを発表の結果の自己評価としているのではないだろうか。良い点について自己評価する場合、見える形のものだけを評価するのではなく、それまでの努力のような、見えないものまでを含んで評価する傾向にあると言えよう。

(2) 自由記述による評価について

①自由記述の分類とその数

自由記述による評価の内容は多岐にわたり、分類した結果、以下の9項目となった。

- 1. 舞台演出を含む全体について
- 2. ダンスや振り付けについて
- 3. 演技について
- 4. 歌について
- 5. ピアノ伴奏について
- 6. 衣装について
- 7. 間違いについて
- 8. 練習について
- 9. その他 心情等

分類したこれらの結果は図 1 の通りである。

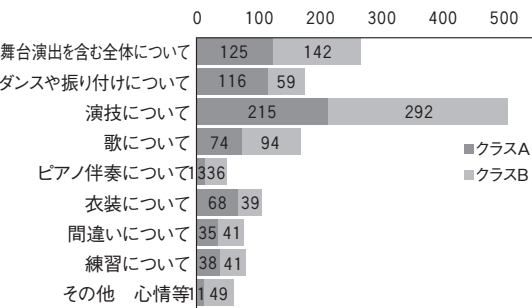


図 1 自由記述の分類と回答数

項目別に記述の数を見てみると、3. 演技について が507と記述数が最も多く、次いで、1. 舞台演出を含む全体について 2. ダンスや振り付けについて 4. 歌について 6. 衣装について 8. 練習について 7. 間違いについて 9. その他 心情等 5. ピアノ伴奏について の順であった。

表 2 記述数の多い項目順

記述の分類項目	記述数
3. 演技について	507
1. 舞台演出を含む全体について	267
2. ダンスや振り付けについて	175
4. 歌について	168
6. 衣装について	107
8. 練習について	79
7. 間違いについて	76
9. その他 心情等	60
5. ピアノ伴奏について	49

②クラスによる評価の違い

クラスにより、記述数の多さの順に違いがあった。(図 2、3)

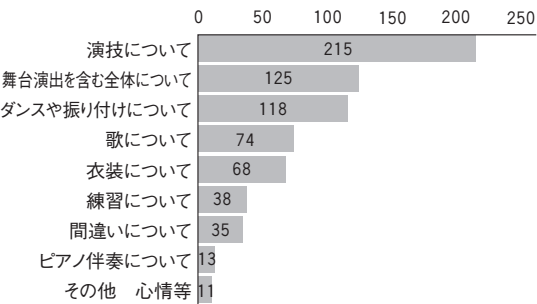


図 2 クラスAの記述の多い順

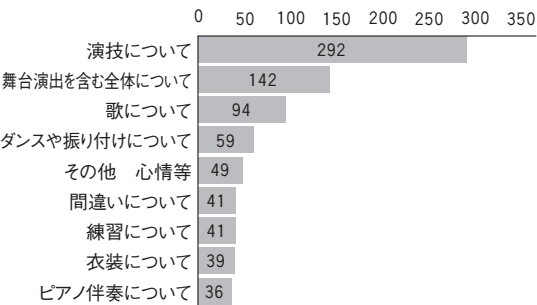


図 3 クラスBの記述の多い順

上位 2 位までは同じであるが、注目したいのは、9. その他 心情等 である。クラスAでは11の記述しかみられず、記述数順は最下位であるが、クラスBでは 5 番目に位置している。このクラスBでは、「みんなが笑顔で楽しそうに演じていて、みているこちらも楽しくなった。」「楽しみながら演じた」と、楽しさについての記述が目立った。また、「楽しんでやれていたのが 1 番よかった。」や「前回（中間発表）より、きちんとしなきゃ！と思い、楽しめなかったのが残念だった。」と、発表者が表現することを楽しんでいるか、また評価者である観客も楽しんでいるかどうかについて評価の対象としている。この発表が、クラス毎に行ったものであり、普段の学校生活の大半をクラスで共に過ごしていることから、目の前で終わっているオペレッタのみを評価するのではなく、表現者の心情等まで推察して評価しているのであろう。それが、クラスBに多く表れたのは、クラ

ス集団の結びつきに起因していると考えられる。楽しさの他に、評価できるところとして、「1人1人の個性がとてもよく表されてる作品だと感じた。」や「太陽のハマリ役は見事」等、クラスの仲間でないと言えないような内容がみられた。

③評価の観点について

最も記述数が多かったことから、学生たちの評価の観点は 3. 演技について に集中していたと言えよう。記述の内容を見てみると、オペレッタは歌を中心とした音楽劇であるが、「しっかりと客席を向いて演じていたので、顔のむける方向としてはよかった。各役の演じ方をとても工夫して、それぞれの役らしさを出せたのでよかったです。」や「旅人はもっとゆっくり歩くとよかったと思う。」「落ち葉の動きをせっかくなので、しゃがんでいるときももっと大きく動いてもいいと思った。」と、評価の対象は演技そのものとなっている。

オペレッタにもかかわらず、学生が最も多く評価の対象としたのは歌やピアノ伴奏といった音楽ではなく、演じること自体であった。また、本学生らのほとんどが授業で聞くまで「オペレッタ」という言葉を知らず、また、オペラやバレエといった舞台芸術等を鑑賞したことがなく、そして、大半が舞台上で何かの役を演じるということが初めてであり、演じること自体に大変苦労をしていた。それぞれが自分の演じる、または演じた役と無意識のうちに見比べ、評価したのではないだろうか。鈴木も相互評価では、自己評価で生じた個人的な満足や不満足が基準になり、自己の演技と比較して評価する観点が生じていると述べている。⁶⁾

次に、1. 舞台演出を含む全体について の評価数が多くなっているが、内容は「舞台の階段もつかっていて広くつかえていいと思った。」や「最後に役者の紹介があったのが良かった。」「アレンジが少なく、型にはめすぎている」と、いった舞台演出や全体の印象について記述している。

演技と同様に、舞台上での見せ方や構成の仕方に苦心をした分、自身のグループと見比べ、評価している。自分たちでは気付かなかった舞台の使い方や演出を評価する傾向にあることが記述内容

から示唆された。

次に多いのが、2.ダンスや振り付けについてである。これは、クラスAのバレエを取り入れた振り付けについての評価数が多くなったために全体の評価数が多くなったと考えられる。しかし、それを除けばどちらのクラスも4.歌についてと続く。

④歌について

歌についての記述は、声の大きさについてがほとんどであったが、「声が大きくて良かった」「声が小さくてよく聞こえなかった」という内容の記述以外に、「歌詞があいまいだった」と、歌声が小さいという指摘の中には、歌詞が曖昧であり、そのせいで声が小さくなり聞こえないというものも含まれていた。しかし、少数ではあったが、自己評価の記述の中には歌い方に言及するものもあり、「歌は楽しくあたたかく歌っていくべきでした」や「歌にもっと表現力をつけたいと思った」というものがみられた。

歌は、演技することよりも意識が低く、客席まで届く声で歌っているかそうでないかということと、歌詞を正確に歌っているかということに留まった。これは学生たちが普段から、歌詞通りに人に聞こえるように歌っているかどうかという最低限のことにしか意識が向いておらず、歌うことが「表現」であるということを全く意識していない結果と言えよう。

⑤ピアノ伴奏について

オペレッタにとってピアノ伴奏は、劇の進行を支える重要な役割を果たしている。しかし、記述数は最も少なくなっている。そして、内容は「ピアノの間違いが多かった」「ピアノ伴奏が速かったので歌いにくそうだった」という、間違いやテンポのズレの指摘が多く、評価できるところの項目は、ピアニストによる自己評価で、曲の入りのタイミングが上手くいったことや、独自で入れた効果音について良かったというものであり、ピアノ伴奏を評価する記述はほとんど見当たらなかった。

学生たちにとってピアノ伴奏は、得意な子が担当をし、歌いやすいように、タイミングやテンポ

を上手く合わせてくれて当たり前。それを間違えたり上手いかないと、観客も演技者も評価の対象とするが、そうでなければ対象から除外しているのだ。

⑥プラス評価とマイナス評価の項目別内訳

全記述を分類し、記述数を‘評価できるところ’と‘改善した方がよいところ’で割合で表して図にしたものが下の図 4 である。

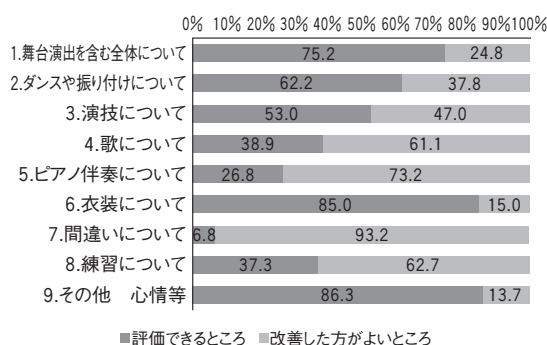


図 4 プラス評価とマイナス評価

4. 歌について 5. ピアノ伴奏について 7. 間違いについて 8. 練習についての 4 項目はマイナス評価の方が多かった。8. 練習について以外は、技能に関するものであり、それらについて、学生たちはプラス面より、マイナス面で評価する傾向にあると言えよう。

まとめ

授業内で行ったオペレッタの発表における自己評価と、他のグループの評価の結果の分析、考察から以下の 4 点のことがわかった。

①他者評価より自己評価の方が評価ポイントが低くなる傾向にある。

同一作品を演じ、見て評価しても、自己評価する時には、プラス面よりもマイナス面のポイントをより高く評価するので、評価のポイントは低くなる。

②独創的な演出であったとしても他者評価ほど自己評価は高くない。

独創的な発想であっても、それは、自己評価の時点で、高評価のポイントとは繋がらず、そのこ

と自体を高く評価することはない。

③オペレッタは音楽劇であっても、学生の評価の観点は演技にある。

学生にとって、最も評価しやすい、自己との比較において評価するため、評価の観点は、音楽ではなく、演技に集中する。

④技能に関する項目の評価はマイナス評価傾向にある。

上手い、下手のはっきりとした、わかりやすい歌やピアノは、否定的であったり、矯正的な評価をしやすい。

本論の対象となる学生たちは、将来保育者となる。その上で、オペレッタを授業内で取り上げる意味は 2 つある。1 つ目は、保育者 = 表現者である。そこで、いかに与えられた課題の中で自己を表現するか。また、その課題とは何であるのかを見極める力が必要となる。オペレッタの場合、音楽の要素をかなり含んだ劇である。それを、どう理解し表現するかが課題となろう。2 つ目は、保育現場でいかに子どもの表現を適切に評価するかである。本学生たちは、オペレッタの劇部分においてしか評価しておらず、‘適切に評価できる’とはまだ言えない。保育現場では、子どもたちの表現を受け止め、さらにそれを昇華させることができるような指導力が求められる。

今後は、課題を明確にし、そして判断し、表現することだけに留まらず、目の前の表現されたものを総合的に見て的確に評価できるような力をつけるべく指導が必要となろう。造形や絵画のような後に形となって残る表現とは違い、身体的な表現も音楽的な表現も、表現すると同時に消えてしまう。それらをいかにキャッチし、的確に評価するか。また、それらを柔軟にキャッチできるような保育者の育成、そして、評価のフィードバックをするような指導が必要となろう。

引用・参考文献

- 1) 鈴木裕子 1998「身体表現における評価観点について—評価方法の違いからの比較—」日本保育学会大会研究論文集 (51) PP.290-291
- 2) 林和美、江原千恵、魚住美智子 2009「オペレッタ創作活動による表現力の育成と保育へ

- の応用Ⅳ—作品の創作および発表に対する自己評価—」大阪城南女子短期大学研究紀要43 PP.95-110
- 3) 魚住美智子、林和美、江原千恵 2009「オペレッタ創作活動における表現力の育成と保育への応用Ⅵ—作品の創作及び発表に対する『動き・ダンス』の自己・他者評価—」大阪城南女子短期大学研究紀要43 PP.79-94
- 4) 小澤和恵 2008「表現力と人間性を高める総合的表現活動の実践—オペレッタ上演から何を学ぶか—」埼玉純真短期大学研究論文集1 PP.39-45
- 5) 河北邦子 2012「保育者養成における音楽表現指導実践力についての研究Ⅰ—模擬保育の自己・他者評価調査を通して—」山口学芸研究3 PP.55-73
- 6) 前掲書1)
- 7) 伊藤智里、青井則子、秋政邦江、尾崎公彦 2010「オペレッタ授業における学習者自身による自己評価—客観的視点を養う評価シートの作成—」川崎医療短期大学紀要30号 PP.77-82

About the viewpoint of the evaluation to expressive

— From the result of the self-evaluation and the others evaluation of the Operetta —

Yokoi, Shiho*

保育現場では、日常のごっこ遊びから、発表会等で披露する、劇やミュージカル、オペレッタといった、役になりきって表現することは盛んに行われている。しかし現状では、そのような身体的な表現活動に対しての評価尺度が明確に示されていないことで、活動への保育者の援助の視点が不明瞭な状態にあると指摘されている。

本研究では、8つのグループ全てが同じ作品を演じ、それを評価した。同一のシナリオ、歌、曲を、いかに工夫して演じ、アレンジを加え、それぞれのグループのオリジナルとするのが試された。発表の後、自己評価と他者評価の両方をした。そこで学生らの評価の観点を明らかにすることで、今後の表現活動における評価の対象を明確にすることができ、保育においては、子どもに対して的確な援助ができるようになる。また、演じる際（園における発表会等での指導においても）の適切な‘見せるポイント’を掴んだ表現ができるようになると思う。

学生のオペレッタ発表の自己評価と他者評価の結果から、評価の観点として演技に集中し、他者評価より自己評価の方が、よりマイナス面を強調して評価することが明らかになった。また、技能に関する評価は肯定的な評価より、否定的や矯正的な評価の方が目立って多くなされる傾向にあることがわかった。

キーワード：自己評価と他者評価，オペレッタ，評価の観点

*Nagoya Ryujo Junior College